



KAWASAKI
MUNICIPALITY
HOSPITAL

町立病院だより

人生会議

理想の最期について考えたことはありますか？

皆さんは今まで、自分自身や大切な人の最期について、考えたこと、考えさせられたことはありますか？

「家族に囲まれて眠るように逝きたい」「周囲に迷惑をかけないピンピンコロリが一番だ」

「可能な限り治療を受けて、一日でも長生きしてもらいたい」

「お腹に穴を開けてまで(経腸栄養をしてまで)、長生きしてほしい」

高齢・多死社会を迎えた今、医療・介護の現場では、患者さん本人やその家族から、このような言葉を聞く機会が増えてきました。では実際のところ、一人ひとりの「理想の最期」について、「いつ」「どこで」「誰が」その人の理想を話し合い、伝え、決めるのでしょうか。

いざという時、残された人は

病に倒れ、自身の死期を実感して、最期の過ごし方を考えて、家族と相談し、全員が納得した方法を担当医へ伝える…こういった手順がまず思い浮かぶかもしれませんが、しかし、いざ治療が必要となったときには、話ができない状態かもしれませんし、認知症などのため自分の意向をうまく伝えられないかもしれません。

そんなとき、自分の代わりに病状を聞く人は、患者さんの最期の過ごし方をどうしていくべきか、思い悩んでしまうこともあるでしょう。

大切な人と話し合ってみませんか？

「理想の最期」についての話し合いは、かかりつけ医（外来主治医）との日々の対話の中で、大切な人を交えながら進めていくことが望ましいとされています。元気なうちから縁起でもないことを話し合う必要はないのかもしれませんが、話し合いだけならタダですし、損をすることは（おそらく）ありません。自分自身や周囲の人の人生会議について、少しでも興味をもった人は、まずは次のことについて、考えを整理することから始めてみませんか？

- ・もし心臓や肺の動きが急に止まってしまったら、命を救うための処置（心臓マッサージ、電気ショック、人工呼吸器管理など）を受けることを希望するか
- ・何らかの理由で、周りに自分の意思を適切に伝えられなくなってしまったら、その後の治療方針は代わりに誰に決めてもらうか



地方独立行政法人
川崎町立病院
内科医師
うえむら りょうすけ
上村 亮介



ホームページ